



# 日本人の美意識 和田貞夫

## ◆フランス宮殿の美

筆者は、かつて文部省の海外教育事情調査団員としてヨーロッパに滞在し、各国の教育実態の調査に従事していたが、その傍余暇を利用して各国の宮殿や美術館を見学して廻った。なかでもフランスの宮殿・美術館の豪華・華麗さには実に圧倒された。

ルイ十四世が、パリ郊外に構築したベルサイユ宮殿は実に豪華絢爛たる建物で各部屋には多くの壁画や彫刻が飾られ天井には天使の絵が描かれていた。特に、ベルサイユ条約の調停式が行われて有名な鏡の間には壁面のすべてが鏡で天井にはルブランの絵が描かれており、その美しさは圧巻であった。

また、幾何学的に設計された庭園も素晴らしいバラの花が一面に咲き乱れ、セーヌ川から引かれた水が溢れる池には多くの噴水が設置され、吹き出す水と共に古代戦車に乗った騎士が飛び出してくる趣向には驚いた。

フイリップ二世によつて城砦と

して構築されたルーブル宮殿は、軍事的様式から迎賓館へと様変わりし現在は世界有数の美術館となつていて、ミロの「ビーナス」やダビンチの「モナリザ」など教科書に載つてゐる多くの名品を真近かに見る事ができた。いずれの美術品も均整のとれた理想的な完

全の美そのもので実に理知的・合理的な美しさであつた。

## ◆日本の宮殿・皇居の美

二〇〇六年、筆者は叙勲の栄に浴し、受章のために夫婦で晚秋の皇居に参内する事となつた。

宮内庁の先導で皇居の車寄南溜（玄関）から入り正面階段を上ると東山魁夷画伯の「朝明の潮」の大壁画があり、更に進み二階の宮中晩餐会などが開かれる皇居最大の間である豊明殿へ入つた。

室内は壁面に中村岳陵画伯の原

画による「豊明雲」の綴織が張られていて淡い緑色と茜色の空と雲が壁一杯に広がっていた。天井は鳥取県産の若桜杉の化粧板が張られ、藤色の大シャンデリアが輝い

ていたが、室内には壁画や彫刻などの装飾品は一切なく清潔にして氣品に満ちた部屋であった。

式典では、平成天皇からお祝いのお辞を賜つたが終わると突然、陛下が降壇され整列している私達の目前に近付かれ、一人ひとりに「おめでとう」とのお言葉を戴き大感激!!生涯最高の感謝の極みであった。

記念撮影のために庭へ出て中庭を見たが、中央に御影石の回遊路があり周りに那智白の玉石が敷き詰められているだけで、他には僅かに加藤清正が朝鮮半島から持ち帰った銅製の大きな水盤が隅に置かれていた。

実際に気品に満ちた純然たる和風

の清爽な皇居の美しさであった。ヨーロッパの宮殿と日本の皇居の美しさを直接体験した筆者は、その両者の美意識の違いに深い感慨を覚え、今回ここに筆を執つた次第である。

日本人は、昔から人間と自然との調和・一体感を重んじ合理性より余情・陰影をよりよく愛好してきた。自然と対決しようとする西洋人と異なつて自然の中に融け込み人間と自然が表裏一体となる自然観・人生観・生活観を持つて生活を営んできた。四季の季節の変化の中に生きる日本人の生活感覚はキメ細かく誠に優雅である。茶席のお菓子の銘も若草・松風・時雨・淡雪・夜の梅・落雁・卯の花餅・

ツヘ留学中、友人の西洋人とピクニックへ行つたが好天であまりにも気持ちが良かつたので思ひも氣持ちが良かつたので想像力を巡らして次へと進む、そこには豊かな感性が生まれるのである。

日本人の美意識は、不完全であるが故に何を足したら完全になるのか、奇数の美は、不完全であるが故に何を足したら完全になるのか、想像力を巡らして次へと進む、そこには豊かな感性が生まれるのである。

先日、出雲市農協本店の玄関口ビーで久方振りに平田町出身の歴史物を得意とする画家、小村大雲の力作「宇治川の合戦」の屏風を見た。六曲一双の大作で右隻と左

## ◆偶数の美と奇数の美

数字には、2・4・6の様に割り切れて余りのない完全の数と1・3・5と割り切れないで余りの残る不完全の数がある。ルーブル美術館で見たミロのビーナスやダビンチのモナリザなどは、いずれも西洋人の求める理想的で健全な人間の姿で均整のとれた完全な美しき偶数の美であった。

それは気持ちの受け止め方とその表現の違いであつて、日本人は受動的に自然の中に融け込もうとするが、西洋人は能動的に自然を征服しようとする生き方の違いである。人間生活の生き方の形を「文化」と呼んでいるが、前者を静型文化、後者を動型文化と筆者の独りよがりで名付ける事とする。

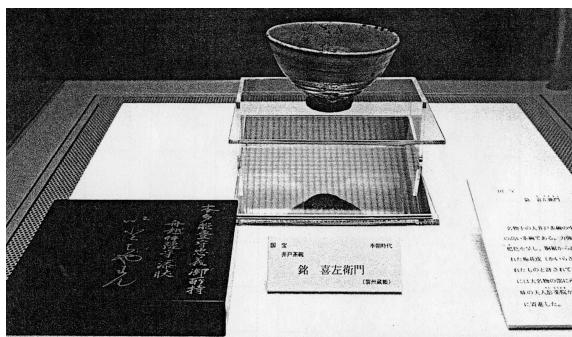
静型文化は、相撲で勝てば敗者が手を差し伸べて助け、いたわる自己抑制を美德とする稻作・農耕民族の文化であり、動型文化はモンゴル力士の様に勝てば思わずガツツボーズをする自己顯示の牧蓄・狩猟民族の文化である。

宗瑞宗匠が、よく筆者にお花は完全に咲かない薔薇が良く、月は満月より雲間の月が良いと言われた事を覚えているが、それは薔薇が満開となつたらどんな花になるだろうか、月が雲間から出てくるとどんな美しい月になるのかと未来への想像と期待感・洞察力が湧くからである。室町時代の茶人の村田珠光も「月も雲間のなきは嫌にて候」と言って不完全な美を大切にしていた。日本人は、昔から余韻・余情感・陰影の残る不完全な奇数の美を好んできた。

奇数の美は、不完全であるが故に何を足したら完全になるのか、想像力を巡らして次へと進む、そこには豊かな感性が生まれるのである。

日本人の美意識がつてそんなに持っているのである。

## 三斎曜会だより



松平不昧公と大徳寺孤蓬庵展 国宝 喜左衛門井戸茶碗

隻に一騎づつ先陣を競つて急流の渦巻く宇治川を乗り切ろうとする馬上姿の勇ましい武者が描かれてゐるが、佐々木高綱と梶原景季の二人の武将以外は全くの白紙である。これを見た筆者は瞬間、余白の中に実際に見た事がある宇治川の激しい急流を思い浮かべると同武者の姿や鬨の声・勝負の結果を想起するのであつた。これこそが日本文化特有の余白の美・奇数の美である。

## ◆国宝・喜左衛門井戸茶碗

一一〇〇一年、出雲文化伝承館では、開館記念事業として「松平不昧公と大徳寺孤蓬庵展」を開催し天下一の名碗とされる国宝の喜左

元々この茶碗は、朝鮮半島の貧しい民が近くの山から採取した土をこねて焼いた飯茶碗であつた。人々この茶碗は、朝鮮半島の貧

可なくしては拝観も許されない門外不出の名碗として名高い。

元々この茶碗は、朝鮮半島の貧

をこねて焼いた飯茶碗であつた。

美しい民が近くの山から採取した土をこねて焼いた飯茶碗であつた。

カイラギや歪みも作られた物でなく自然に事無く生まれた物である。

禅僧は、平常心の大切さを説いたが、正しく喜左衛門井戸茶碗には尋常の美しさ、無事の美があり、「茶禪一味」にふさわしい名碗であると言つてよい。

衛門井戸茶碗を展示した。

諸説あるが井戸の名称由来は、最初の持ち主が大和の豪族井戸氏であつたからで、また慶長年間に

は大阪の商人竹田喜左衛門が所有

していたからである。やがて松平不昧の所持するところとなつた。不

昧は、この茶碗を「よなく愛玩し

片時も離さず参勤交代の際にも同

伴していたという。この茶碗には古

来、所有者は腫れ物に病むとい

りを恐れて夫人が孤蓬庵へ寄進し

て今日に至つているが、松平家の許

可なくしては拝観も許されない門

外不出の名碗として名高い。

元々この茶碗は、朝鮮半島の貧

をこねて焼いた飯茶碗であつた。

美しい民が近くの山から採取した土

をこねて焼いた飯茶碗であつた。

元々この茶碗は、朝鮮半島の貧

茶の湯で使用される茶碗を大別

すると、次の三つに分別される。

・唐物（中国より伝來した物）

・高麗物（朝鮮半島より伝來した物）

・和物（日本で作られた物）

室町時代には、唐物が愛用され

たが室町末期からは高麗物や和物

が多く用いられる様になる。特に

高麗物は、侘びの茶にふさわしい

として三島・刷毛目・粉引・斗々屋・

熊川・蕎麦・柿のへた・井戸など

茶の湯の茶碗の中核として愛用さ

れている。

九曜会では、細川家から茶道具

の名品を借用して茶会を開催する

事があるが、ある茶会で細川護熙

公が御来席され「私の茶碗を使つ

ていますか。」との問い合わせがあり、「恐

れ多くて展示して拝観していま

す。」とお答えしたところ「茶碗

は飾つて見る物ではなく使う物で

す。遠慮なく使いなさい。」との

お言葉があり恐縮した事がある。

茶の湯の道具は、見て楽しむ物で

なく平常に使つて楽しむ物である。

全く作為のない無の境地の作

品で多くの茶人達は、その無の美

茶道で茶室は修業場である」（茶と美）と記しており、日本人の美意識と仏法が結合して茶道は発展

してきたのである。松平不昧も「茶の本意は知足であり足らない中に満足を見出せば心富む」（伝家法）

と茶儀は礼と和とに基き一身世に處する要道なり」（石州流思召書）

と茶の湯の修業に禅の教えが大切であると説いている。

臨済録に「無事是れ貴人、ただ造作する事なれ」とあり、わざとらしい作法や徒らに技巧に走り

作意の過ぎたる事のない様に、自然のままに平常心に満ちた無事の生き方が大切であると説いている

が、禅を修する茶の湯も無事の茶でなければならぬ。

喧騒な現代社会の中にあって明るい未来へ向かつて生きしていくためには、ぶれることなく唯ひたすら平常心で事無く歩む努力、無事の生き方が求められている。

この原稿の執筆中、ふと机上の

山陰中央新報（四月二十三日）の

同級生の藤岡大拙君の「コロナ禍に生きる」と題する論稿が目に止

まつた。末尾を要約すると「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風

の音にぞおどろかれぬの歌が象徴するように古来、日本人には

かすかなものの中にも動きや躍動を感じる感性や美意識があり、ひそかに生きる思想がある。禪

を転じて福となすために、今こそ

冷静にあわてず忍耐強く、こぼす

らと日本人の美意識を守り回復へ

向かっていく努力が必要である」

（文責筆者）との主張であった。

まったく実に正論であり同感である。

道とは、人を目的地へ導き到達させる方法・手段・過程である。

茶の湯の歩む道も、茶を学ぶ人々

を真の茶の湯の求める境地へと導く方法・手段・過程でなければならない。

茶の湯の歩む道も、茶を学ぶ人々

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

【薄茶席】

観翠庵道場 富士の間

担当 杉原社中・杉山社中

来客者数 五四名

雨との天気予報でしたが幸い好天気に恵まれ、紅葉の美しい道場で一服のお茶を差し上げる事が出来、嬉しく思っています。

床の細川怡園公「清福」の軸、祥山宗匠銘「千柿」の茶杓、宗浦家元お手造の茶盤「思い川」等々三斎流が脈々と続いている事を嬉しく力強く思いました。

杉原・杉山両先生、そして水屋を担当された方々も高齢者が多く体調等心配致しましたが、お元気でそれぞれの持ち場で務めて頂きました。若手の中学生の運びもあり、未来へと続く希望を感じる事も出来ました。感謝申し上げます。

(杉山社中 錦織君子)

◆三斎流との出会いから伺います

高校生の時に茶道部でした。その時は裏千家でした。高校卒業後は大阪で就職しましたが、母の病気が重くなつたので、一ヶ月位で島根に帰つて来ました。昭和二十九年、縁あって私が二十一歳の時に、峯寺住職の松浦快芳師に三斎流を習い始めました。

◆当時の思い出は?

峯寺での稽古は週二回でした。

下熊谷の自宅から、着物を持って自転車で通いました。峯寺の長い坂の下に自転車を止め、下から歩いて上りました。冬は大変でした。あら時など、稽古が終わつて帰る頃には積雪が凄く、雪をかき分けながら下りた事もありました。

その頃母が亡くなり、二度目の母が来ました。「人生、やりたいことをやつて好きに生きなさい」と言われ、当時、保母さんになる道に進むか迷いました。どうせなら好きな道に進みたいと思い、当時、出雲市大津町にあつた職業補導所（現在の職業能力開発校）の男子しか入れない学科でしたの



杉山郁子先生

で、当時二十四歳で、しかも女性の私は最初は断られましたが、熱意が伝わったのか、何とか入ることが出来ました。

荷車で近くの萬祥山窯に土をもらいに行つたり、土を濾して練つたりと、力仕事が大変だった事を覚えています。ろくろで茶碗や茶入、花入等を作りました。一年の予定でしたが、結局二年いました。

担当された方々も高齢者が多く体

調等心配致しましたが、お元気で

それぞれの持ち場で務めて頂きました。若手の中学生の運びもあり、

未来へと続く希望を感じる事も出

来ました。感謝申し上げます。

(杉山社中 錦織君子)

◆三斎流との出会いから伺います

高校生の時に茶道部でした。

その時は裏千家でした。高校卒業後は大阪で就職しましたが、母の

病気が重くなつたので、一ヶ月位

で島根に帰つて来ました。昭和二

十九年、縁あって私が二十一歳の

時に、峯寺住職の松浦快芳師に三

斎流を習い始めました。

◆当時の思い出は?

峯寺での稽古は週二回でした。

下熊谷の自宅から、着物を持って

自転車で通いました。峯寺の長い坂

の下に自転車を止め、下から歩いて

上りました。冬は大変でした。あ

る時など、稽古が終わつて帰る頃に

は積雪が凄く、雪をかき分けながら

下りた事もありました。

その頃母が亡くなり、二度目の母が来ました。「人生、やりたいこ

とをやつて好きに生きなさい」と

言われ、当時、保母さんになる

道に進むか迷いました。どうせな

ら好きな道に進みたいと思い、当

時、出雲市大津町にあつた職業補

導所（現在の職業能力開発校）の

男子しか入れない学科でしたの

会でご活躍され、昨年米寿を迎えた杉山郁子先生です。

## 第一回 先達探訪

～三斎流の先生を訪ねて～

今回は長年、九曜会や雲南翠木会でご活躍され、昨年米寿を迎えた杉山郁子先生です。

今日は長年、九曜会や雲南翠木

会でご活躍され、昨年米寿を迎えた杉山郁子先生です。

（ご冥福をお祈り申し上げます）

（広報部 梶谷旭生）

（松浦快芳先生（令和一年十一月）  
禿晴雄先生（令和一年十一月）  
古谷益子先生（令和二年一月））

うにして何とか続けていました。

昭和三十一年に、峯寺で祥山宗匠から初伝を頂きました。昭和四十年に中伝を頂き、すぐに自分で

もお茶を教え始めました。その頃にも通わせて頂いておりました。

山で茶花を求めてから、祥山宗匠の所へ通っていました。

もお茶を教え始めました。その頃は、観翠庵での祥山宗匠のお稽古

たりと、力仕事が大変だった事を覚えています。ろくろで茶碗や茶入、花入等を作りました。一年の予定でしたが、結局二年いました。

担当された方々も高齢者が多く体

調等心配致しましたが、お元気で

それぞれの持ち場で務めて頂きました。若手の中学生の運びもあり、

未来へと続く希望を感じる事も出

来ました。感謝申し上げます。

（杉山社中 錦織君子）

◆三斎流との出会いから伺います

高校生の時に茶道部でした。

その時は裏千家でした。高校卒業後は大阪で就職しましたが、母の

病気が重くなつたので、一ヶ月位

で島根に帰つて来ました。昭和二

十九年、縁あって私が二十一歳の

時に、峯寺住職の松浦快芳師に三

斎流を習い始めました。

◆当時の思い出は?

峯寺での稽古は週二回でした。

下熊谷の自宅から、着物を持って

自転車で通いました。峯寺の長い坂

の下に自転車を止め、下から歩いて

上りました。冬は大変でした。あ

る時など、稽古が終わつて帰る頃に

は積雪が凄く、雪をかき分けながら

下りた事もありました。

その頃母が亡くなり、二度目の母が来ました。「人生、やりたいこ

とをやつて好きに生きなさい」と

と言われ、当時、保母さんになる

道に進むか迷いました。どうせな

ら好きな道に進みたいと思い、当

時、出雲市大津町にあつた職業補

導所（現在の職業能力開発校）の

男子しか入れない学科でしたの

会でご活躍され、昨年米寿を迎えた杉山郁子先生です。

今日は長年、九曜会や雲南翠木会でご活躍され、昨年米寿を迎えた杉山郁子先生です。

き替えられ、お席に入られてからも何度か足袋は汚れていないか」と気遣われているお姿から、宗匠の氣概が伝わってきたように思いました。

残念ながらその三ヵ月後、祥山宗匠はお亡くなりになりました。宗匠にも通わせて頂いておりました。

山で茶花を求めてから、祥山宗匠の所へ通っていました。

もお茶を教え始めました。その頃は、観翠庵での祥山宗匠のお稽古

たりと、力仕事が大変だった事を

覚えています。ろくろで茶碗や茶入、花入等を作りました。一年の予定でしたが、結局二年いました。

担当された方々も高齢者が多く体

調等心配致しましたが、お元気で

それぞれの持ち場で務めて頂きました。若手の中学生の運びもあり、

未来へと続く希望を感じる事も出

来ました。感謝申し上げます。

（杉山社中 錦織君子）

◆三斎流との出会いから伺います

高校生の時に茶道部でした。

その時は裏千家でした。高校卒業後は大阪で就職しましたが、母の

病気が重くなつたので、一ヶ月位

で島根に帰つて来ました。昭和二

十九年、縁あって私が二十一歳の

時に、峯寺住職の松浦快芳師に三

斎流を習い始めました。

◆当時の思い出は?

峯寺での稽古は週二回でした。

下熊谷の自宅から、着物を持って

自転車で通いました。峯寺の長い坂

の下に自転車を止め、下から歩いて

上りました。冬は大変でした。あ

る時など、稽古が終わつて帰る頃に

は積雪が凄く、雪をかき分けながら

下りた事もありました。

その頃母が亡くなり、二度目の母が来ました。「人生、やりたいこ

とをやつて好きに生きなさい」と

と言われ、当時、保母さんになる

道に進むか迷いました。どうせな

ら好きな道に進みたいと思い、当

時、出雲市大津町にあつた職業補

導所（現在の職業能力開発校）の

男子しか入れない学科でしたの

会でご活躍され、昨年米寿を迎えた杉山郁子先生です。

今日は長年、九曜会や雲南翠木会でご活躍され、昨年米寿を迎えた杉山郁子先生です。